

実践報告

青少年教育施設における長期集団宿泊活動が情動知能に及ぼす影響

The Influence of Long-term Group Lodging Activities upon Children's Emotional Intelligence at Youth Educational Facilities

庄子 佳吾	SHOJI Keigo 国立花山青少年自然の家
白岩 悟	SHIRAIWA Satoru 国立那須甲子青少年自然の家
及川未希生	OIKAWA Mikio 国立岩手山青少年交流の家
鈴木 亮	SUZUKI Ryo 国立磐梯青少年交流の家

キーワード

情動知能、小学生、長期集団宿泊活動、青少年教育施設

要旨

情動知能とは、感情の働きを踏まえて、自分や相手の感情をうまくコントロールする能力である。これは、子どもの健全な成長を見守るうえで重要な概念であり、教育的にも大きな意味をもつと考えられる。

本研究は、長期集団宿泊活動が子どもの情動知能に及ぼす影響を明らかにすることを主な目的とし、国立青少年教育施設における4泊5日以上 of 教育事業の参加者を対象に、「児童用情動知能尺度 (EQSC)」を用いて、事業の事前、事後の計2回調査を行った。

その結果、参加者の情動知能は、事前から事後の反復要因によって統計的に有意に高い値を示し、得点が向上した。また、性別要因を加えた分析の結果、対応領域、合計得点のすべてにおいて交互作用と性別要因による主効果は認められなかった。よって、対応領域、合計得点において、長期集団宿泊活動を経験することによって男女に違いなく、情動知能が向上したことが明らかになった。

I. 緒言

現代の子どもたちは、さまざまなストレスを経験し、それにより心の問題が増大し続けている。子どもたちのストレスの原因は友人関係、学業、学校生活、家庭環境、健康問題など多岐にわたり、ストレスに対処できなくなった子どもたちは、さまざまな身体症状や問題行動を呈している。「自分の衝動や不快な感情をコントロールできないことにより、落ち着かない。相

手の微妙な感情を感じ取れない、あるいは感じ取らないようにしている」といった心理状態も観察されている。具体的な事例として、文部科学省が2012に発表した⁽¹⁾学校内外における暴力行為発生件数の推移、いじめの認知(発生)件数の推移、不登校児童生徒数の推移がある。年度により調査方法が異なっているものもあり、減少傾向も見られているが、依然として多い段階にあるといえる。

一方、国立教育政策研究所の調査研究⁽²⁾で全国の子どもに関わる機関からデータをとった、いわゆる「キレる子ども」の原因を調査した研究がある。こちらでは、「キレる子ども」の成育歴に関する要因として家庭での不適切な養育態度が一番多くなっている。それから、家庭内の緊張状態が多くなっており、家庭の問題が子どもの「キレる」問題と関連していることが分かる。不適切な養育態度とは、厳しい過度な統制と養育不全、放任と過保護が上がってきている。子どものいじめ、不登校、問題行動、少年犯罪、親の児童虐待、このような問題はさまざまな要因が指摘されているが、情動の問題にも関わる部分が多いと思われる。具体的には、相手の情動を正確に読み取ることができるかという情動認知の問題、適切に表出できるのか、そして自分の中で情動を調整することができるのかという情動の問題がある。

情動とは、心理学の専門用語であり、一般には、感情の下位概念、すなわち、さまざまな感情の一部と言われている。

近年の情動に関わる代表的な研究としては、サロヴェイとメイヤー⁽³⁾の研究がある。伝統的な知能 (IQ) 研究に、情動の制御という社会適応との関連から説明した研究で、彼らは、情動知能 (EI: Emotional Intelligence)⁽⁴⁾ という概念を提起している。この研究では、情動知能とは「情動情報処理の一種であって、自己と他者の情動の正確な評価、情動の適切な表現、および人生の質を高めるような形での適応性の情動制御を含むもの」と定義されている。

一方、ゴールマン⁽⁵⁾は、情動知能を「自分自身を動機づけ、挫折しても我慢強く頑張れる能力、衝動をコントロールし快楽を我慢できる能力、自分の気分をうまく整え情動の乱れに思考力を阻害されない能力、他人に共感でき希望を維持できる能力である」としている。そして、従来の知能 (IQ) と対比させるための略語として「EQ」という言葉を広く社会に紹介した。さらに、島井・大竹ら⁽⁶⁾複数の研究者により、先天的な要素が少なく、教育や経験を通して改善・習得可能であることが強調され、心身の健康の促進、環境への適応、集団の健全さにつながることへの期待が表明されている。

このように情動知能は、子どもの健全な成長を見守るうえで重要な概念であり、教育的にも大きな意味をもつと考えられる。しかしながら、わが国において、子ども理解と発達支援に

とって有用な概念である情動知能については、主として成人を対象に研究が行われてきた背景があり、成人用の情動知能尺度 (EQS) が開発され、測定尺度としての信頼性と妥当性が確認されている。この尺度は、現在、職場における人材管理などに有効利用されている⁽⁷⁾。

但し、情動知能に関しては、その尺度や計測対象に関して、心理学研究者の中でも意見が分かれており、現在の段階で広く世界に使われている明確な科学的定義とされているものではない。しかしながら、日本の子どもたちの置かれている状況を考えると、友人関係、学業、学校生活、家庭環境、健康問題などの多くは、子どもたちの心理や情動に深く関わる問題であると考えられるため、本研究では、長期集団宿泊活動を通じて子どもの情動知能に変容が見られると仮定し、調査研究を行なった。

特に体験活動や野外教育に関する分野で子どもを対象に情動知能の影響を検証した例はあまりなく、こうした活動によってどのような変容があるか明らかにすることは、今後の子どもの豊かな体験活動の推進、並びに国立青少年教育振興機構における教育事業⁽⁸⁾の評価及び、自然体験活動の有効性の調査研究の検討材料としても有用であると考えられる。また、国立青少年教育振興機構の全国28施設で恒常的に行っている研修支援事業において、宿泊を伴う体験活動を経験する小学校等の子どもたちの集団宿泊活動の教育的効果、その意義の証明、有効性を発信する一助となりうる。

以上を踏まえ、本研究は、青少年教育施設における長期集団宿泊活動が子どもの情動知能に及ぼす影響を明らかにすることを主な目的とする。

II. 方法

1. 調査対象及び事業内容

4泊5日以上長期集団宿泊活動を行う教育事業である、平成24年度国立那須甲子青少年自然の家 (以下、那須甲子) 教育事業「なすかしの森 セカンドスクール」⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾参加児童35名 (男子16名、女子18名、年齢 10.7 ± 0.5 歳)、平成24年度国立岩手山青少年交流の家 (以下、岩手山) 教育事業「テンちゃん一家の一週間〈通学合宿〉」⁽¹¹⁾⁽¹²⁾参加児童43名 (男子27名、女子16名、年齢 10.3 ± 0.8 歳)、平成24年度国立磐梯青少年交流の家 (以下、磐梯) 教育事業「通学キャンプ」⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾参加児童53名 (男子21名、

女子32名、年齢10.5±0.7歳)を調査対象事業とした。

調査対象は参加者である小学4～6年生131名(男子64名、女子67名、年齢10.5±0.7歳)である。各教育事業ともに、施設を拠点に学校へと通学する、学習する教室を施設に移して活動する等、学校生活と密接に関わっており、学校生活の変化や新たな人間関係の構築への不安を解消すること等をねらいとした事業である。

調査は各事業ともに事前(以下、PRE)、事後(以下、POST)の計2回に質問紙法で測定を実施し、データ処理については回答信頼性傾向の判断基準に満たないものと回答に不備のあるものを除いた120名(男子59名、女子61名、年齢10.5±0.7歳)を有効回答者とした。

なお、那須甲子では、学校生活の場を施設に移していることから期間中は施設の宿泊棟に宿泊し、定時に施設内の学習室へ登校した滞在型、岩手山・磐梯では、期間中は施設の宿泊棟に宿泊し、登校日は施設から車等にて通学した

通学型と本稿では定義する。

各事業の内容を主なプログラムを以下に示した。(表1、2、3参照)

那須甲子では、学校生活の場を施設に移していることから期間中は施設の宿泊棟に宿泊し、定時に施設内の学習室へ登校した。岩手山・磐梯では、期間中は施設の宿泊棟に宿泊し、登校日は施設から車等にて通学した。

那須甲子のプログラムでは主に午前から午後にかけて、施設の学習室、広大な自然を活用し、教員が主担当として各教科の授業や体験活動を取り入れた授業を行う「スクールタイム」と夕方から夜にかけて教育支援スタッフ、施設職員が補助指導をしながらナイトハイキングやキャンプファイヤー、スポーツレクなどの活動を行う「なすかしの森タイム」とふりかえりを行った。

一方、通学型である岩手山・磐梯は学校から帰ると、個人学習を行い、その後は毎日変化をもたせたプログラムを行っている。

表1 「なすかしの森 セカンドスクール」の主なプログラム(那須甲子)

	午前	午後	夕方	夜
11月12日(月)	開会式・スクールタイム	スクールタイム	なすかしの森タイム	なすかしの森タイム・ふりかえり
11月13日(火)	スクールタイム・登山		ふりかえり	なすかしの森タイム・ふりかえり
11月14日(水)	スクールタイム・野外炊飯	スクールタイム・紙すき体験	なすかしの森タイム	なすかしの森タイム・ふりかえり
11月15日(木)	スクールタイム・職業体験	スクールタイム	なすかしの森タイム	なすかしの森タイム・ふりかえり
11月16日(金)	スクールタイム・社会科見学	まとめ・閉会式		

表2 「テンちゃん一家の一週間<通学合宿>」の主なプログラム(岩手山)

	午前	午後	夕方	夜
11月11日(日)		開会式・オリエンテーション	アイスブレイク	学習時間・ふりかえり
11月12日(月)	学校生活		個人学習	学習・交流・ふりかえり
11月13日(火)	学校生活		個人学習	学習・交流・ふりかえり
11月14日(水)	学校生活		個人学習	学習・交流・ふりかえり
11月15日(木)	学校生活	学習時間	室内スポーツ・班活動	学習・交流・ふりかえり
11月16日(金)	学校生活		個人学習	学習・交流・ふりかえり
11月17日(土)	さよならパーティー	閉会式		

表3 「通学キャンプ」の主なプログラム(磐梯)

	午前	午後	夕方	夜
11月18日(日)	開会式	ウォークラリー	休憩	交流活動・ふりかえり
11月19日(月)	学校生活		個人学習	創作活動・ふりかえり
11月20日(火)	学校生活		個人学習	室内スポーツ・ふりかえり
11月21日(水)	学校生活		個人学習	家族への手紙・ふりかえり
11月22日(木)	学校生活		個人学習	お楽しみ会・ふりかえり
11月23日(金)	まとめ・閉会式			

岩手山では、担当職員の専門分野の講座やプロジェクトアドベンチャー⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾のビーイング等の手法を用いたふりかえりを行い、交流だけではなく、学習や信頼関係作りにもつながるプログラムとなっている。

磐梯では、施設の立地条件を生かした会津ぬり体験といった普段できない創作活動への取組や家族への手紙や毎日の絵日記作成等、郷土に対する意識向上、個々人のふりかえりに重きをおいたプログラムとなっている。

全体で共通するものとして食事は学校給食や野外炊飯等を除き、毎食各施設の食堂を利用するものであり、期間中は毎夜、班ごとに話し合いを行い、活動についての評価と反省をした。また、翌日の計画をたて、同時に必要な物品等の交渉も参加者自ら行なった。

2. 調査・分析方法

本研究では、皆川ら⁽¹⁸⁾が開発した児童用情動知能尺度 (EQSC) を用いた調査を実施した。児童用情動知能尺度 (EQSC) とは、先述にある、

情動知能指数 (EQ) を評価するために標準化の手続きを経て一般に市販された心理検査である情動知能尺度 (EQS) を、皆川らが小学生の生活場面に照らして吟味・改訂して作成し、信頼性 (内的整合性、再検査信頼性) および妥当性 (因子的妥当性、構成概念的妥当性) をもつ尺度として立証したものである。

調査に先立って調査実施者 (事業担当者) に対して書面によって本調査の意義およびデータの活用方法を説明し、調査に参加する同意を対象者から得た上で、調査用紙を配布した。

この児童用情動知能尺度 (EQSC) は、「自己対応 (intrapersonal)」、「対人対応 (interpersonal)」、「状況対応 (situational)」の3領域12下位因子から成り、各下位因子は、3つの質問項目によって構成されており、合計38項目から成っている (そのうち2項目はチェック項目)。(表4参照) 質問項目ごとに5段階評価で回答を求めるもので、評価は、それぞれ「まったくあてはまらない」(0点)から「非常によくあてはまる」(4点)の5段階で得点化

表4 児童用情動知能尺度 (EQSC) 計38項目 (36項目+チェック2項目)

領域	対応因子	下位因子	項目文
自己対応	自己洞察	1. 自己洞察	1. 自分が思っていることや感じていることがいつでもわかる
			2. 自分の気持ちが、変化するのがわかる
			3. 今の自分の気持ちを言葉で表すことができる
	自己動機づけ	2. 自己動機づけ	4. 自分でやろうと思ってやり始めたことは、続けていきたい
			5. 一度やり始めたことは、最後までやり通したい
			6. すぐにできなくても、大切なことは、やり続けるようにしている
	自己コントロール	3. 目標追求	7. 自分でやると決めたことは、やりとげるようにしている
			8. やると決めたことを、すぐにやめてしまうのはよくないことだと思う
			9. 目標のためならば、どんなに大変でも、やりぬく気持ちでいる
	共感性	4. 自制心	10. 自分の気持ちだけでなく、場面を考えて行動している
			11. 休み時間と授業時間との気持ちの切りかえができる
			12. いやなことがあっても、友達にやつあたりしない
対人対応	5. 共感性	13. 友達が喜ぶことをしてあげたい	
		14. どうすれば友達に喜んでもらえるかを考えたい	
		15. 困っている友達がいたら、どうしたのか聞いてあげたいと思う	
	愛他心	6. 愛他心	16. 友達が元気なときには、はげましてあげたいと思う
			17. 友達が嫌がることは言わない
			18. 困っている人を見ると、何とかしてあげたいと思う
対人コントロール	7. 協力	19. だれにでも、進んで手を貸してあげられる	
		20. みんなのためなら、いやなことでもやろうと思う	
		21. 同じ友達だけでなく、いろいろな友達と遊んでいる	
状況対応	8. 人材活用力	22. 友達に手伝いをたのむことができる	
		23. けんかを止めたり、仲直りをさせたりしたことがある	
		24. 初めて会った人も、すぐに友達になる	
	状況洞察	9. 気配り	25. その場のふんいきをこわさないように気をつけている
			26. みんなで何かを決めるとき、みんなの意見をきちんと聞いて決めている
			27. 朝の会、帰りの会などの司会をテキパキとやることができる
リーダーシップ	10. 楽天主義	28. 何かを始めるときには、うまくいこうと思う	
		29. 失敗することを考えるより、まずやってみようと思う	
		30. 今日うまくいかないことも、明日になればうまくいきそうだと思う	
状況コントロール	11. リーダーシップ	31. リーダーとして、みんなをまとめていくことが得意である	
		32. 自分が見つけた良い方法を、みんなにすすめることができる	
		33. みんなで相談するときには、まとめ役をすることが多い	
状況コントロール	12. 状況コントロール	34. 班がえがあっても、すぐに班の人たちと仲良くできる	
		35. 何か困ったことが起こっても、どうしたらよいか考えられる	
			36. その場面に合わせて、行動することができる

チェック項目①：友達を傷つけることだけは、したくない
 チェック項目②：人の話は、しっかりと聞いた方がよいと思う

し、個人の「情動知能」得点の合計はチェック項目を除き、0～144点の範囲となる。採点は、下位因子ごとに項目の合計得点を算出し、さらに算出した下位因子得点を対応する因子ごとにまとめて、対応因子得点を算出した。最後に、対応因子得点を「自己対応」、「対人対応」、「状況対応」の3つの領域ごとに合計し、領域得点を算出した。

採点・集計後、PRE-POST間の反復要因を独立変数、対応領域・合計得点、それに加えて、各領域の下位因子を従属変数とする一要因分散分析を行った。さらに、独立変数に「男子」、「女子」による性別要因を加えた二要因分散分析も行った。すべての結果は、平均値±標準偏差で表した。統計処理には「SPSS Statistics 17.0」を使用し、有意水準は5%未満を有意とした。

なお、これまで児童用情動知能尺度 (EQSC) を用いた研究で、小学生の平均値はほとんど公表されていないため、平均値との比較検討は行っていない。

Ⅲ. 結果

1. 一要因分散分析における得点変化

本調査における、参加者の傾向を把握するため、前述の反復要因を独立変数とした一要因分散分析を行った (表5参照)。その結果、反復要因において全体の対応領域、合計得点は、「自己対応」($F(1, 119) = 92.19, p < .001$)、「対人対

応」($F(1, 119) = 59.37, p < .001$)、「状況対応」($F(1, 119) = 65.24, p < .001$)、「合計得点」($F(1, 119) = 92.56, p < .001$)において統計的に有意に高い値を示しており、得点が向上していることから長期集団宿泊活動が子どもの情動知能の能力向上に影響を与えていることが明らかになった (図1、2参照)。また、その下位因子においても、すべて統計的に有意に高い値を示しており、得点が向上している (図3参照)。

施設間の比較において対応領域、合計得点は、那須甲子が「自己対応」($F(1, 31) = 32.50, p < .001$)、「対人対応」($F(1, 31) = 11.00, p < .01$)、「状況対応」($F(1, 31) = 7.38, p < .05$)、「合計得点」($F(1, 31) = 17.85, p < .001$)、岩手山が「自己対応」($F(1, 39) = 34.85, p < .001$)、「対人対応」($F(1, 39) = 15.11, p < .001$)、「状況対応」($F(1, 39) = 26.51, p < .001$)、「合計得点」($F(1, 39) = 30.13, p < .001$)、磐梯が「自己対応」($F(1, 47) = 28.72, p < .001$)、「対人対応」($F(1, 47) = 40.72, p < .001$)、「状況対応」($F(1, 47) = 38.32, p < .001$)、「合計得点」($F(1, 47) = 45.76, p < .001$)となっており、これらも全体の結果同様、統計的に有意に高い値を示しており、得点が向上している。また、その下位因子においても、一部を除き、統計的に有意に高い値を示しており、得点が向上している (図4、5、6参照)。

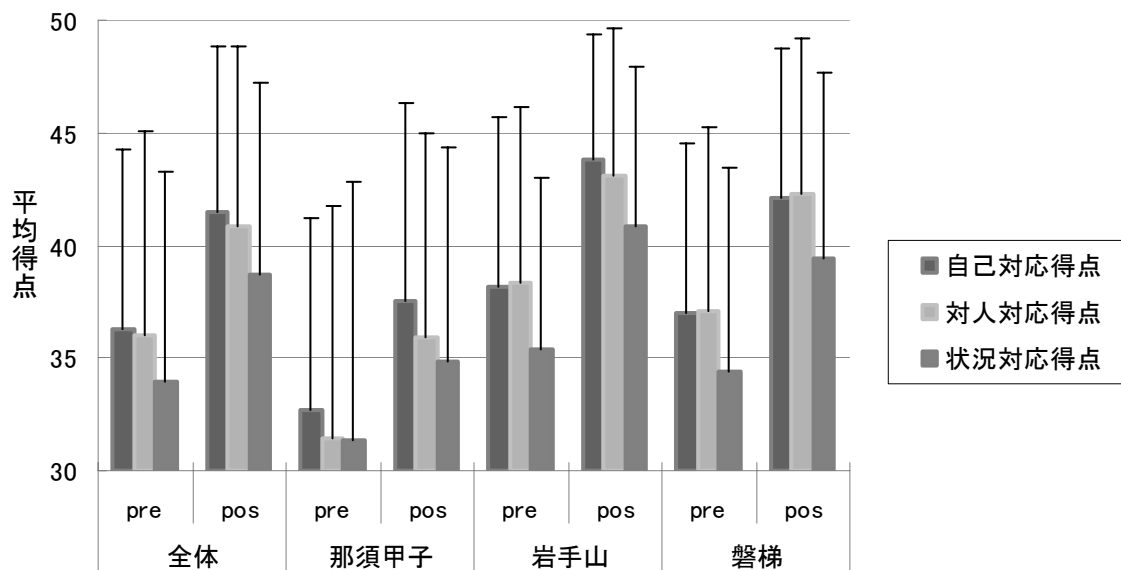


図1 全体、施設別の自己対応、対人対応、状況対応の領域得点の平均と標準偏差

表5 一要因分散分析における児童用情動知能尺度 (EQSC) 得点の変化

	全体			那須甲子			岩手山			磐梯		
	pre	pos	F(1,119)	pre	pos	F(1,31)	pre	pos	F(1,39)	pre	pos	F(1,47)
対応領域												
下位因子												
自己対応得点	36.23 (8.05)	41.48 (7.32)	92.19***	32.69 (8.53)	37.50 (8.78)	32.50***	38.15 (7.55)	43.85 (5.49)	34.85***	37.00 (7.53)	42.15 (6.60)	28.72***
自己洞察	8.02 (2.70)	10.00 (2.45)	88.33***	6.91 (2.59)	8.84 (2.78)	26.25***	8.40 (2.91)	10.50 (2.53)	27.13***	8.44 (2.43)	10.35 (1.88)	34.58***
自己動機づけ	9.65 (2.42)	10.58 (2.01)	26.78***	8.84 (2.67)	9.59 (2.47)	5.37*	9.98 (2.38)	11.30 (1.51)	17.47***	9.92 (2.20)	10.63 (1.78)	6.09**
目標追求	9.39 (2.35)	10.43 (1.95)	32.77***	8.66 (2.44)	9.63 (2.21)	8.24**	10.13 (2.09)	11.08 (1.44)	12.15**	9.27 (2.36)	10.44 (1.98)	12.65***
自制心	9.18 (2.38)	10.47 (2.00)	44.38***	8.28 (2.52)	9.44 (2.49)	9.74**	9.65 (2.36)	10.98 (1.40)	19.45***	9.38 (2.18)	10.73 (1.84)	15.97***
対人対応得点	36.01 (9.07)	40.84 (7.97)	59.37***	31.41 (10.38)	35.91 (9.04)	11.00**	38.35 (7.82)	43.10 (6.57)	15.11***	37.13 (8.14)	42.25 (6.94)	40.72***
共感性	9.55 (2.47)	10.51 (2.03)	27.51***	8.06 (2.78)	9.50 (2.51)	11.52**	10.08 (2.22)	11.00 (1.59)	8.10**	10.10 (2.05)	10.77 (1.80)	8.17**
愛他心	9.37 (2.59)	10.43 (2.06)	31.04***	8.41 (3.06)	9.13 (2.62)	3.81	10.00 (2.10)	11.05 (1.52)	8.19**	9.48 (2.48)	10.79 (1.62)	22.55***
協力	8.53 (2.55)	9.87 (2.37)	50.50***	7.06 (2.79)	8.75 (2.69)	15.62***	9.05 (2.33)	10.30 (2.15)	15.28***	9.06 (2.21)	10.25 (2.10)	19.48***
人材活用力	8.57 (2.72)	10.03 (2.34)	47.71***	7.88 (2.97)	8.53 (2.26)	2.86	9.23 (2.50)	10.75 (2.11)	14.51***	8.48 (2.64)	10.44 (2.15)	40.83***
状況対応得点	33.91 (9.40)	38.68 (8.52)	65.24***	31.38 (11.47)	34.88 (9.45)	7.38*	35.35 (7.65)	40.85 (7.12)	26.51***	34.40 (9.06)	39.40 (8.28)	38.32***
気配り	9.10 (2.43)	10.00 (2.15)	22.64***	8.44 (2.76)	9.00 (2.33)	1.74	9.53 (2.18)	10.63 (1.72)	11.40**	9.19 (2.36)	10.15 (2.15)	12.96**
楽天主義	8.98 (2.82)	10.18 (2.23)	35.26***	8.31 (3.29)	9.34 (2.66)	5.64*	9.55 (2.32)	10.70 (1.81)	9.01**	8.94 (2.82)	10.29 (2.12)	25.08***
リーダーシップ	7.03 (2.95)	8.30 (2.99)	30.95***	6.66 (3.12)	7.38 (3.11)	2.43	7.18 (2.75)	8.75 (3.30)	20.61***	7.15 (3.05)	8.54 (2.54)	13.02***
状況コントロール	8.81 (2.72)	10.20 (2.38)	52.12***	7.97 (3.46)	9.16 (2.58)	7.65**	9.10 (2.16)	10.78 (1.79)	22.70***	9.13 (2.51)	10.42 (2.49)	25.11***
EQSC合計得点	106.15 (24.65)	120.99 (22.73)	92.56***	95.47 (28.75)	108.28 (26.31)	17.85***	111.85 (21.10)	127.80 (18.13)	30.13***	108.52 (22.63)	123.79 (20.53)	45.76***

上段：平均値，下段：標準偏差
* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

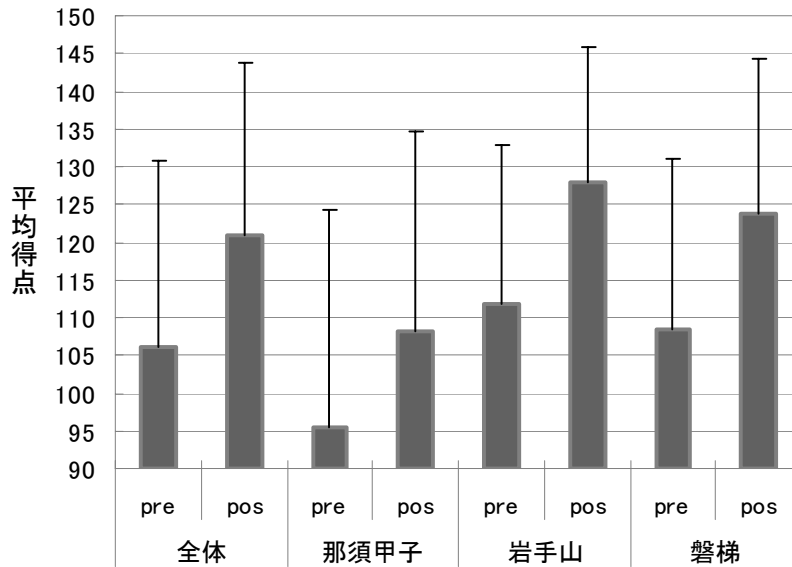


図2 全体、施設別のEQSC合計得点の平均と標準偏差

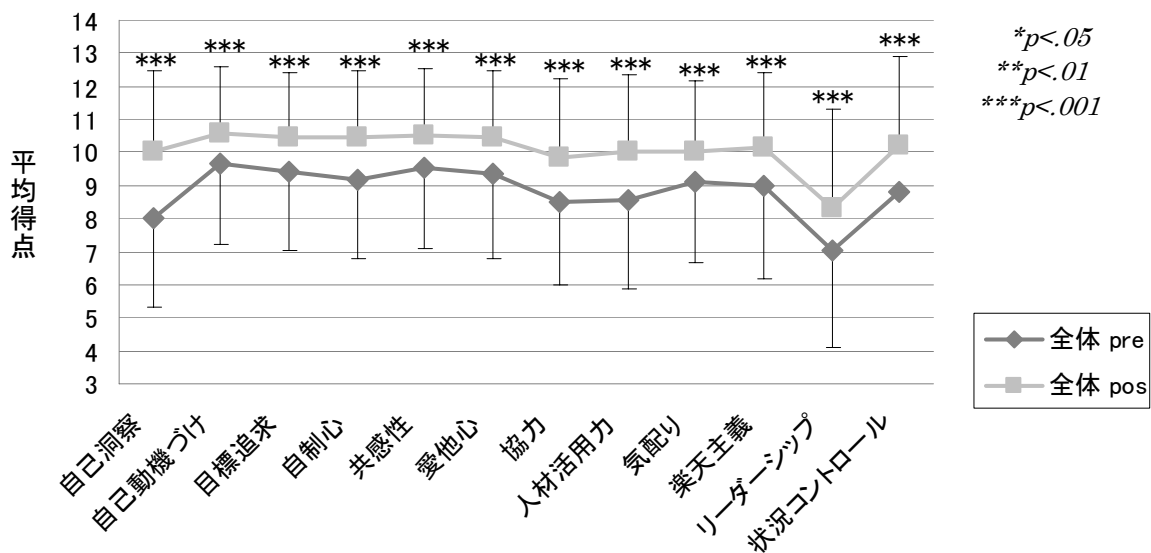


図3 下位因子得点の平均と標準偏差 (全体)

2. 二要因分散分析における得点変化

一要因分散分析より、長期集団宿泊活動が子どもの情動知能の能力向上に影響を与えていることが明らかになった。そこで、その主効果としてPRE-POS間の反復要因と男女による性別要因、交互作用の影響を比較検討した(表6参照)。

その結果、反復要因においては、「自己対応」(F(1, 118)= 91.39、p<.001)、「対人対応」(F(1, 118)= 60.08、p<.001)、「状況対応」(F(1, 118)= 64.65、p<.001)、「合計得点」

(F(1, 118)= 92.01、p<.001)は統計的に有意に高い値を示しており、得点が向上している。また、対応領域、合計得点のすべてにおいて交互作用と性別要因による主効果は認められなかった。よって、対応領域、合計得点において、長期集団宿泊活動を経験することによって男女に違いなく、情動知能が向上したことが明らかになった。下位因子において、性別要因、交互作用より統計的に有意な値を示すものはあるが、すべて反復要因の水準と同等以下である。施設間の比較においても、反復要因により

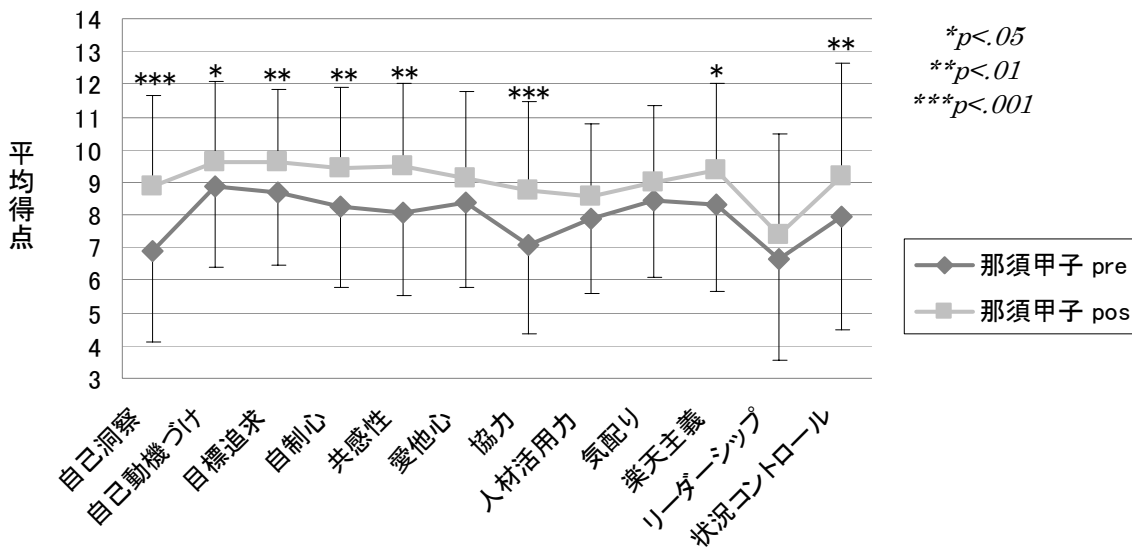


図4 下位因子得点の平均と標準偏差（那須甲子）

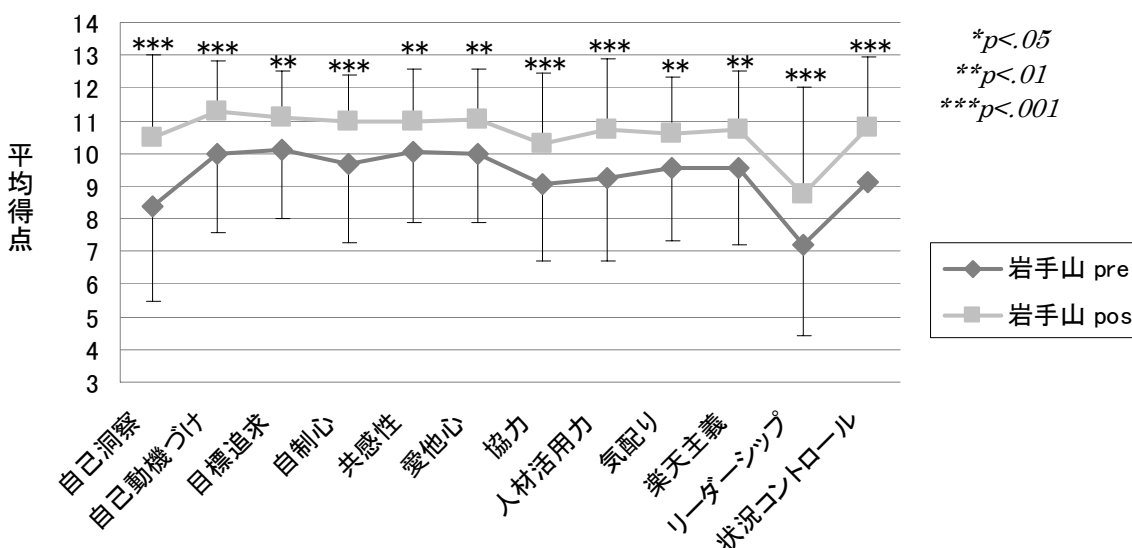


図5 下位因子得点の平均と標準偏差（岩手山）

統計的に有意に高い値を示しており、交互作用と性別要因による主効果は認められず、同様の結果を示している。

上記に加えて、男女間の得点差において、一部の下位因子を除き、男子よりも女子のほうが高い値を示している。これは児童の発達段階によるものと推察されるが、個人差の問題やほかに地域による発達上の差異も見られるであろうことから、違いを適当な形で示すことは現在の段階ではまだ困難が多いといえる。

Ⅳ. 考察

1. 「情動知能」全体の変容

本研究では、長期集団宿泊活動が児童の情動知能にどのような影響を与える関係にあるのか検討することを目的として、4泊5日以上 of 教育事業の参加者である小学4～6年生を対象に質問紙調査を実施した。その結果、長期集団宿泊活動は情動知能の能力向上に影響を与えていることが明らかになった。領域別に見たところ、「自己の心の働きについて知り、行動を支え、効果的な行動をとる能力(自己対応)」、

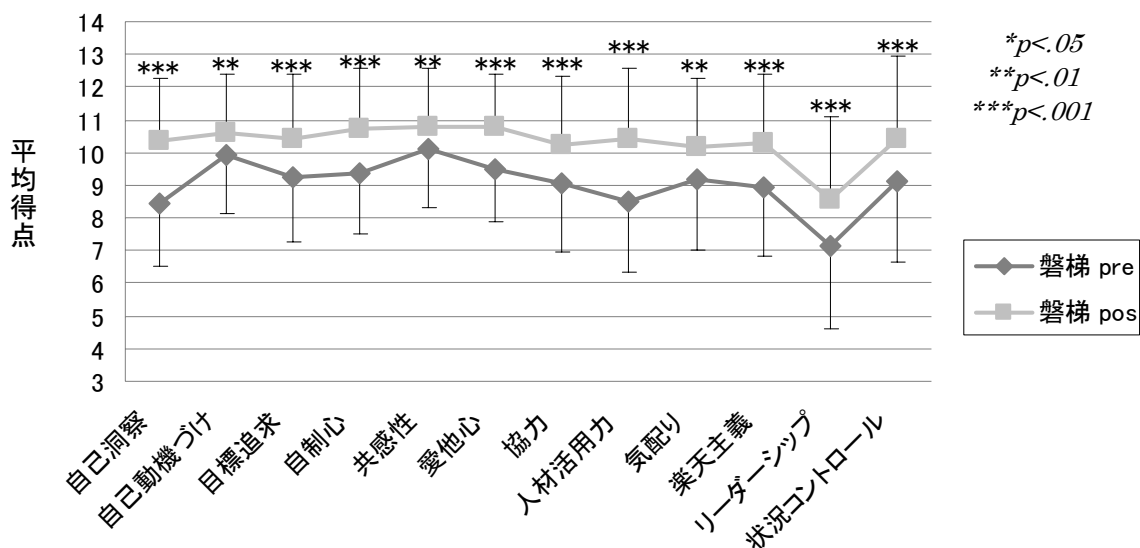


図6 下位因子得点の平均と標準偏差（磐梯）

仲間との信頼関係を必要とする班行動等ストレスを伴う体験を無事克服した成功体験とその共有により、「共感をベースに、他者との人間関係を結び維持することのできる能力(対人対応)」、「自己を取り巻く、あるいは自己と他者を含む集団を取り巻く状況の変化に耐え、自己対応と対人対応を状況に分けて使い分ける統制力(状況対応)」のすべてにおいて統計的に有意に向上した。これより、長期集団宿泊活動を通じて、児童の情動・社会的スキルが向上し、高い教育的効果、影響力をもっている可能性が示唆された。本研究が対象とした教育事業においては、登山等の冒険的で活動量の多い克服的な活動を主としたプログラムや生活環境や自然環境等が厳しく負荷が大きい事業を対象としたものではないものの、プログラムの中で児童が自ら考え、行動する機会が多かったことから、克服的であり、適度なストレスを与えていたと推察できる。また、長期間、保護者のもとを離れ生活することやグループで協力して課題を解決、先を見通した計画を立てていかなければならないといった、非日常的な体験、異なる環境が情動知能の向上に効果的であったとも推察できる。

2. 施設間による比較

施設間の比較も行っていく。情動知能の対応領域、合計得点の変化量より、通学型の岩手山・磐梯は得点の変化の傾向が類似している。

これは、非日常的な体験である施設での生活と日常的な体験である学校生活を交互に繰り返すことにより、「体験学習サイクル」が循環したためと考えられる。つまり、体験をするだけでなく、体験をふりかえり、その意味を考え、そこから何を学ぶのか、その学びを何にどう生かすのかを考え、そして、学びを次の活動や実社会で生かしていく循環過程が成立していたことが統計的に有意に高い値を示し、得点が向上した要因であると推察できる。加えて、両施設ともにふりかえりに重きをおいたプログラムを期間中、継続して実施したことから、児童が計画した行動目標を、実際に行動に移しやすくなったこともその要因であるとも推察できる。

一方、那須甲子では通学型ではなく、期間中、施設への滞在型であったため、常に非日常的な体験をしていたといえる。そして、岩手山・磐梯と比較して宿泊日数が少なく、参加児童の人数も少なかったため、環境面による違いもあったといえる。こうした差異により、得点変化の傾向が他施設と異なる結果を示したと考えられ、日常である学校生活等に学びを生かしていく過程の中で情動知能に影響を及ぼす可能性も示唆された。これより、本研究では実施していないが、今後は日常の学校生活に戻った後の追跡調査を行い、情動知能の得点変化についても比較検討していく必要があるといえる。

表6 二要因分散分析における児童用情動知能尺度 (EQSC) 得点の変化

性別要因 反復要因	男子		女子		主効果		交互作用
	pre	pos	pre	pos	反復要因	性別要因	
自己対応得点	34.97 (8.66)	40.22 (8.43)	37.46 (7.28)	42.69 (5.86)	91.39***	3.76	0.001
自己洞察	7.73 (2.82)	9.75 (2.50)	8.30 (2.58)	10.25 (2.40)	87.63***	1.61	0.02
自己動機づけ	9.15 (2.76)	10.19 (2.39)	10.13 (1.94)	10.95 (1.48)	26.73***	5.95*	0.36
目標追求	9.19 (2.64)	10.14 (2.19)	9.59 (2.04)	10.72 (1.66)	32.46***	2.02	0.25
自制心	8.90 (2.53)	10.15 (2.33)	9.44 (2.21)	10.77 (1.57)	43.97***	2.78	0.04
対人対応得点	34.17 (10.03)	39.85 (9.31)	37.79 (7.71)	41.80 (6.34)	60.08***	3.90	1.76
共感性	8.85 (2.79)	10.20 (2.35)	10.23 (1.91)	10.80 (1.64)	28.75***	7.54**	4.72*
愛他心	8.64 (2.89)	10.08 (2.38)	10.07 (2.04)	10.77 (1.64)	32.12***	8.09**	3.78
協力	8.27 (2.72)	9.64 (2.65)	8.77 (2.38)	10.08 (2.05)	50.11***	1.32	0.03
人材活用力	8.41 (2.81)	9.92 (2.62)	8.72 (2.63)	10.15 (2.04)	47.35***	0.44	0.04
状況対応得点	33.03 (9.87)	37.58 (9.69)	34.75 (8.93)	39.74 (7.15)	64.65***	1.62	0.14
気配り	8.66 (2.45)	9.64 (2.48)	9.52 (2.36)	10.34 (1.72)	22.55***	4.49*	0.19
楽天主義	8.92 (2.99)	10.00 (2.41)	9.03 (2.67)	10.34 (2.06)	34.94***	0.30	0.31
リーダーシップ	7.05 (3.05)	8.14 (3.21)	7.00 (2.89)	8.46 (2.78)	30.71***	0.08	0.66
状況コントロール	8.41 (2.93)	9.80 (2.79)	9.20 (2.46)	10.59 (1.84)	51.67***	3.55	0.0001
EQSC合計得点	102.17 (26.78)	117.64 (26.44)	110.00 (21.94)	124.23 (18.09)	92.01***	3.23	0.16

上段：平均値，下段：標準偏差
* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

上段：F値

V. 結論

1. 本研究の結果

本研究では、児童用情動知能尺度 (EQSC) を用いて、児童の情動知能に長期集団宿泊活動が与える影響を明らかにすることを主たる目的として調査を行い、以下のような結果を得た。

- ① 本研究の対象となった長期集団宿泊活動参加者は全体としてPRE-POS間を比較して、すべての項目において有意に高い値を示した。
- ② 二要因分散分析より、対応領域、合計得点はすべてにおいて交互作用と性別要因による主効果は認められなかった。
- ③ 児童用情動知能尺度 (EQSC) のほぼすべての項目において、男子より女子のほうが高い値を示した。これは児童の発達段階によるものと推察されるが、成人用の情動知能尺度 (EQS) によっても同様の傾向⁽⁷⁾が示されている。

- ④ 施設間の比較において、体験学習サイクル (人と人とが関わりながら、また自分と向き合いながら、そこで起きたことをみんなと分かち合い、なぜそうなったのか、どんな課題があるのか、今の体験からどんな学びがあったのか、そしてそこから次の課題を設定していく循環過程) を循環させることが、情動知能の向上に影響を与える可能性が示唆された。

以上の結果から、長期集団宿泊活動によって児童の情動知能が高まる可能性とともに、実施するプログラムの種類によって異なる能力が向上する可能性も示唆された。これより、本研究では、対象者数が少なく、実験群と統計群の比較ができていないため、その意味では予備的調査といわざるを得ないが、長期集団宿泊活動を経験することによって情動知能が高くなる傾向が示されている。しかしながら、この結果は、自分のことをよく見せようとする反応バイ

アス⁽¹⁹⁾が生じている可能性がある。また、長期集団宿泊活動を達成した結果として情動知能の自己評価が高くなるという可能性もある。これらを排除して児童の情動知能に良い影響を与えるという因果的な関係は追跡研究によって立証されるべきであり、次に取り組むべき課題である。繰り返しとなるが、この研究の問題点としては、比較的少数の調査であること、実験群と統計群の比較ができていないことがあげられる。それに加えて、秋季から冬季にかけてということもあるが、体験活動や野外教育を主とした長期集団宿泊活動ではないことがあげられる。今後、より広範な長期集団宿泊活動の参加者とそれに参加しない同質の集団を対象に、同時期、同回数の子童用情動知能尺度(EQSC)の測定を行うことによって、その教育的効果、有効性を比較検討する必要がある。

2. 今後の課題

本研究の結果、今後の課題として以下のよう
なことが挙げられる。

- ① 実験群と統計群の比較を行い、情動知能の値の変化について検証する必要がある。
- ② 研究対象を拡げ、野外における長期キャンプ等といった体験活動や野外教育を主とした事業を含め、長期集団宿泊活動が情動知能に及ぼす影響を明らかにしていく必要がある。
- ③ 情動知能へ与える影響を明確にするため事業の事前、事後、追跡での児童用情動知能尺度(EQSC)の測定を行う必要がある。
- ④ 児童用情動知能尺度(EQSC)のみではなく、反応バイアス等を考慮し、客観的な指標として生理学的指標等を用いた他の調査も同時に行い、その関係・効果を明らかにする必要がある。

謝辞

本調査を実施するにあたり、ご協力いただきました各教育事業参加者の皆様、質問紙調査実施にあたり、調査をコーディネートして下さいました国立那須甲子青少年自然の家、国立岩手山青少年交流の家、国立磐梯青少年交流の家の皆様に深謝申し上げます。

引用文献等

- (1) 文部科学省, 平成23年度「児童生徒の問題行動等
生徒指導上の諸問題に関する調査」結果につい
て, 2012,
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/09/1325751.htm
- (2) 国立教育政策研究所, 「突発性攻撃的行動及び衝
動」を示す子どもの発達過程に関する研究(「キ
レる」子どもの成育歴に関する研究), 2002
- (3) Salovey, P. & Mayer, J. D, “ Emotional
intelligence ”, *Imagination, Cognition &
Personality*, 9th, 1990, pp.185-211.
- (4) 心の知能を測定する指標である。心の知能とは,
自己や他者の感情を知覚し, また自分の感情をコ
ントロールする知能を指す。
- (5) ゴールマン, D., EQ—心の知能指数, 21版, 土屋
京子訳, 講談社, 1996
- (6) 島井哲志・大竹恵子, 情動知能: その概念, 評価
方法と応用の可能性, 神戸女学院大学論集, 第48
巻第1号, 2001, pp.159-173
- (7) 内山喜久雄・島井哲志・宇津木成介・大竹恵子,
EQSマニュアル, 7版, 実務教育出版, 2001
- (8) 教育事業とは, 国立青少年教育振興機構におけ
る, 青少年の課題や国の政策課題に対応しつつ,
関係機関・団体と連携して, 立地条件及び地域特
性やニーズに対応した, 青少年の体験活動事業や
青少年教育指導者等の養成研修事業などを指す。
- (9) 普段の学校生活(ファーストスクール)ではでき
ないような体験学習を, 授業の一部として, 国立
那須甲子青少年自然の家に長期滞在して行うセ
カンドスクール。学校ではできない教科学習や総
合的な学習, 特別活動などを体験的に学びなが
ら, 基本的な人間関係や生活力の向上を図ること
をねらいとした事業である。
- (10) 国立那須甲子青少年自然の家, 教育事業等個別報
告書 リフレッシュ・キャンプ《オータム》「なす
かしの森 セカンドスクール」, 2011,
http://nasukashi.niye.go.jp/datafile/25_file.pdf
- (11) 子どもたちが国立岩手山青少年交流の家に宿泊
し, 保護者のもとを離れ, 団体生活の中で日常生
活の基本を自分自身で行いながら学校に通い, 人
と関わる力や集団生活のマナー, 基本的な生活習
慣の育成を図ることをねらいとした事業である。
- (12) 国立岩手山青少年交流の家, 事業報告書「テンち
ゃん一家の一週間」, 2012,
<http://iwate.niye.go.jp/24/tencyan-ikka/tencyan-ikka/tencyan-ikka-houkoku.pdf>

- (13) 子どもたちが国立磐梯青少年交流の家に宿泊し、保護者のもとを離れ、団体生活の中で日常生活の基本を自分自身で行いながら学校に通い、自立的な生活態度やよりよい人間関係を形成する力を高め、子どもたちの社会性を育成することをねらいとした事業である。
- (14) 国立磐梯青少年交流の家、事業報告書「通学キャンプ」、2011、
http://bandai.niye.go.jp/-datablock/1033_file_1.pdf
- (15) ショーエル, J., ブラウティ, D., & ラドクリフ, P., アドベンチャーグループカウンセリングの実践, 初版, プロジェクトアドベンチャージャパン訳, C.S.L. 学習評価研究所, 1997
- (16) クレイドラー, W., ファーロン, L., コウレス, L., & ブラウティ, I., プロジェクトアドベンチャーの実践 対立がちからに一グループづくりに生かせる体験学習のすすめ, 初版, プロジェクトアドベンチャージャパン訳, C.S.L. 学習評価研究所, 2001
- (17) プロジェクトアドベンチャージャパン, グループのちからを生かす—プロジェクトアドベンチャー入門 成長を支えるグループづくり, 初版, C.S.L. 学習評価研究所, 2005
- (18) 皆川直凡・片瀬力丸・大竹恵子・島井哲史, 児童用情動知能尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討, 鳴門教育大学研究紀要, 第25巻, 2010, pp. 31-37.
- (19) 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司, 心理学辞典, 初版, 有斐閣, 1999
- (20) 表5、表6における、F値は2群の等分散性の検定や分散分析などで用いられる。後者では、ある要因で説明できる分散が誤差分散に比べて大きいかどうかで要因効果を検定するために使われる。
- (21) 表5、表6における、p値は有意確率のことである。調査により得られたデータから統計量を計算し、その値以上の統計量が得られる確率。有意確率がまえもって定めた有意水準より小さい場合に帰無仮説を棄却し、大きい場合に帰無仮説を採択する。
- (22) 図1～図6は、量的変数（スケール）の分布を調べることができる箱ひげ図である。箱ひげ図とは、ばらつきのあるデータをわかりやすく表現するための統計学的グラフである。黒線（ひげ）は箱のどちらか（または両方）の端から、最大で箱の長さ（第1-第3四分位点間）の1.5倍しかない。ひげはすべての観測値（ただし箱から箱の長さの1.5倍よりも離れている値、つまり外れ値を除く）をつないだものである。